ばってん

事務長会報第37号
平成27年３月31日
長崎県公立学校事務長会
長崎西高等学校内
〒852－8014
長崎市竹の久保町１２－９
電話（095）861－5106

ホテル セントヒル長崎
TEL095-822-2251
長崎市筑後町4番10号

私の朝のリフレッシュ

事務局長（大村高等学校）　宮　崎　　守

西彼町立大串小学校が私の新任校である。各学年１クラスで少人数の落ち着いた静かな学校でした。当時学校は、県や文部省の指定を受けて「体力づくり」に取り組んでおり、私も赴任早々、児童の体力づくりを目的としたグランド周辺の遊具づくりを手伝っておりました。男性職員は、西彼大瀬戸町の山林から払い下げを受けた電柱の搬出や校庭での遊具づくりなど、汗だくの作業が多い職場でした。さらに、夏休みに入る前には、25mプールの塗り替えを１週間かけて行うなど、作業ばかりの私を見て事務職員の仕事を児童は理解できなかったようです。この塗装、素人仕事でしたので果たして何年持てたのか、とんだ迷惑ではなかったのか聞くに聞けず、町への迷惑を思うと冷や汗ものです。

さて、私は今、学校で掃除をしています。始めた動機は、新任研修において先輩事務長さんの講話に掃除体験の話がありそれを聞いていたことと、その後に勤務した職場での会話がきっかけでした。その会話とは、通勤の途中、職場近くになって「落ち葉で散らかっているね」と何気なく玄関前の状況を見た上司の話でした。この職場とは、諏訪公園の中に設置されている県立長崎図書館でしたが、高木生い茂り台風でも通過すれば倒木などで整理に数日を要したこともある、落ち葉が絶えない職場なのです。それ故に、来館者が見る職場について、自分自身では気づかず対応もできていない朝の玄関に「はっ」としたからです。

会話をした次の日から清掃を始めましたが、始めると大自然と通勤時間との格闘の日々でした。掃き清めた次の一瞬には無情に落ちてくる枯れ葉のために成果が見えず、自分の目と心に残る「やった」という一瞬の自己満足に酔うしか無いのです。

また、住まいが遠く電車に乗るために起床時間と朝の天候がこの日以来、私の心配事の一つになってしまいました。

この掃除を行うに当たって、私自身２つの決意をして始めました。その１つは、「勤務時間内には行わない」こと、さらには「他の人に協力を求めない」ことです。

なぜ、そう決めたのか。それは、これまでの経験から行為に対する評価や批判には、自分の目と他人の目があり概して好意的には見てもらえないこと、また、行為に対する期待や成果を求めると何事も長続きしないとの思いがあったからでした。

当時は、この少し偏屈な決意を抱いて掃除をしておりましたが、学校に異動してからは思った以上に生徒の元気な挨拶や協力に励まされ、予定を決めて作業を行うなど楽しい時間となっています。

話は変わりますが、今の学校は多忙になったと思っています。新任当時の学校には宿直室も残っており、年配の職員から古き良き時代の話も聞いていたし、校庭では校長がのんびりと庭木の手入れをする姿もありました。職員にとっても学校はゆとりのある働きやすい職場だったと思っています。

昨今は残念ながら、ゆとりと思っていた作業も出来なくなり、その技能も失われていると感じています。職員が担ってきた作業は業者まかせになっていき一抹の寂しさを感じる中で、私は掃除という楽しみを見つけることが出来ました。

皆さんもデスクワークから開放される時間、体を動かし職場や業務の中から自分自身が「やった」と感動できるものがあればいいなと思っております。

最後になりますが、私にも「ばってん」原稿の依頼がやってきました。「何を書いてもよい」とのお話でしたがやっぱり悩みました。会報に汚点を残す心苦しさを「恥は掻（書）き捨て」とばかりに書いてしまいましたが、会員皆様の寛大なお心に期待して終わりにいたします。ありがとうございました。

退職を間近にして思うこと

佐世保工業高等学校　津　村　博　之

今年度で定年退職を迎えるが、特に２学期なってからは「残り何ヶ月」「この仕事もこれで最後」とよく思ってしまう。自分がこれまで勤めてきた中での思い出では、初任地でそれも最初にその地に行った時である。

昭和56年４月から採用され、初任地の上対馬高校に採用前の３月下旬に行くことになった。長崎空港からＹＳ11機に乗って対馬空港で降り、比田勝行きのバスに乗り換えた。２時間ぐらいで着くかなと思っていたが、１時間ほど過ぎてからは、薄暗い山の中の登り下りを繰り返して、３時間かけて学校がある比田勝に着いた。学校で何をしたかの覚えはないが、帰りは夜11時ごろの比田勝発小倉行きのフェリーに乗って帰った。長い旅行に行った気分だった。

事務長には平成18年６月１日付の年度中途になった。佐世保商業で勤務の時、５月のＰＴＡ総会の代休日の平日、大好きな室内球技にはまっていたら、携帯に学校から電話が入り、取ってみると校長が出て学校に来るようにと言われた。何も悪いことはしていないはずと考えながら学校へ行くと、校長から「津村さん、ニュース、事務長になったよ」といきなり内示を受け、五島高校の事務長となった。

事務長会では平成22年度に佐世保工業に異動した際、当時の佐世保地区の会長から「所属はもう合同協議部しか残っていないよ」と言われて合同協議部に所属した。更に数日後には部長までお願いされ、よく分からないまま部長を務めることになった。部の目的は事務長会と協会の統合に関する調査研究を行うことで、２年目には協会の事務職員と一緒に研究を行った。何から始めてよいか手探りの状態で、最初は各人が現在の学校事務に関する問題点を率直に出し合って、意見交換を行うことから始まった。作成した報告書を基にして行われた投票の結果、統合には成らなかったが、学校訪問やアンケート調査を行った他県の事務長さんとも話すことができ、事務長として貴重な経験をさせてもらった。

学校を取り巻く環境は更に厳しくなると思いますが、事務長さん方が協力して問題解決に努められるようお祈りします。

～学校事務とは何か～

長崎明誠高等学校　稲　垣　洋　一

就職して35年間、学校事務という仕事は何だろうかと考え続けたが、結論の出ないまま退職することになった。

子供から「お父ちゃんは何の仕事ばしよっとね」と聞かれると、「先生達の給料を計算したり、物を買ったり…。」とか口を濁すのが常だったが、本人にも良く分かっていない。

大学で留年を重ねたあげく「長崎県教員を目指そう」と本屋に行ったら、「公務員試験問題集」があった。無知とは恐ろしいもので「教員も公務員に違いない」と手に取ると、「学校で事務を行う」という職種がある。「教壇に立つのも『事務』と言うのだろう」と、妙に納得して買って帰った。

内容を読んでも、当然ながら教職専門科目が無い。変だとは思ったが「教員には一般常識の方が重要なんだろう」と思い直した。根本的な間違いに気付いたのは、受験願書を出す前日だった。我ながら下宿で大笑いしたことを覚えている。

結局そのまま学校事務を受験して就職した。２年目に教員試験を受けてみたが見事に落ちた。実は女房（既に教員だった）と結婚する頃で、先方に「私も教員になるつもり」と話した手前、受験せざるを得なかったのだ。

その女房によると、私が教員になっていたら「生徒がかわいそう」らしい。

独りよがり、言語不明瞭、説明努力皆無とのこと。でもこれって、事務職員としても失格か…。

ともあれ、これまで「大過無く」と言いたいところだが、失敗には事欠かなかった。

あわやという事もあったが、幸いに生き延びてきた。感謝に堪えない。　　合掌。

―「小さな島の大きな挑戦」―

奈留高等学校　安　田　　誠

奈留高校に着任し、早くも一年が経ちます。実は、地名や校名として「奈留」という響きは知ってはいましたが、恥ずかしながら内示を受けるまで奈留島が五島列島のどこに位置するのかも知りませんでした。

奈留島は、五島列島の真ん中の島で、人口は約2,800人、総面積24.49ｋ㎡の小さな島です。漁業が盛んな時代には、島内に小学校3校、中学校２校がありましたが、過疎化が進むにつれ小中各１校となり、平成13年度から奈留高校・奈留中学校との連携型中高一貫校、平成20年度からは、小学校も含めた小中高一貫教育の島となっています。

奈留での小中高一貫教育の一番の特徴は、何と言ってもその立地だと思います。元々、中学校と高校はグランドを挟んで向かい合う立地でしたが、小中高一貫となったのを機に小中学校が新校舎に建て替り、より高校校舎に近い位置になりました。高校と小中学校間は、渡り廊下で簡単にアクセスできるようになり、中高職員の相互乗り入れ授業での移動や、高校生の音楽の授業を小中学校の音楽室で行なうなど、施設面でも連携・交流がスムーズに行える環境となっています。

このように、県下でも３校しかない小中高一貫教育を特色とする学校に勤務し、事務長として求められているものは何かを自問自答しながら、夕方５時頃には、夕食には何を作ろうか自問自答（？）していた一年だったような・・・。単身赴任の楽しさ、もとい、寂しさからか、若手の先生方と職員住宅で朝方まで飲み明かすこともあり（大学生か！）、職員間での連携・交流がスムーズに行える環境作りに励んだと言えば聞こえは良いかも。

さて、タイトルの「小さな島の大きな挑戦」、これは、奈留高校のキャッチフレーズです。この秋に迎える奈留高校創立50周年記念式典に向け、私もますます大きな挑戦の日々が続きます。諸先輩方、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします。

（写真は、小中学校（左側）から高校（右側）につながる渡り廊下です。）

新任事務長として

豊玉高等学校　松　田　芳　誠

この度、思いがけない人事により豊玉高校に赴任することとなりました。本当に急なことで、担当としてやっていた仕事は、まさかこんな事になると想像もしておらず、ゆっくりしていたので、うまく整理することができずに９月30日まで仕事して、引越しも服などとりあえず必要な物を車に詰め込んで、その日の夜中に博多から出るフェリーに乗り、10月１日の朝に厳原港に着いて、そのまま学校に行って職員朝会に出席する、という慌ただしさでした。

赴任した豊玉高校は、生徒数47人と少なく、前任校の大村城南の十分の一しかいません。今まで事務室に掃除に来る生徒と部活動のことや勉強や試験のことなど話をして、３年間でだいたい100人ぐらいの生徒の顔と名前が一致できていたので、豊玉高校では全員の顔と名前が判るようにしよう！と思っていましたが、生徒数が少ないため事務室掃除の割り当てが無く、生徒が来ません。生徒と接する機会が少なくて残念です。

私が思う事務長と担当の仕事の一番の違いは、ほとんどの業務に「〆切」が無いことです。今までは、〆切を考えながら仕事をしてきましたが、嫌なことは後に回そうとする性格の私には、〆切が無いのは、良いことなのか悪いことなのか悩ましいところです。また、直接、県費の業務をすることが無くなって「やりがい」の部分では達成感がなく、物足りなく感じています。

ネガティブなことばかり挙げてしまいましたが、まずは事務長として生徒のために何ができるのかを念頭に置き、効率的かつ効果的な仕事ができるよう、職員とのコミュニケーションを多くとり、働きやすい職場環境づくりに努めたいと思っています。教えていただいたり、助けていただくことばかりかと思いますが、よろしくお願いいたします。

「チーム長崎∞（無限大）」の次は・・・「めざせ日本一、とびだせ世界へ」

長崎県教育庁競技力向上対策課長　森　栄二

「君の夢　はばたけ今　ながさきから」のスローガンのもと開催された「長崎がんばらんば国体」と「長崎がんばらんば大会」が、無事終了して２ヶ月が過ぎました。長崎国体のために設置された競技力向上対策課ですが、既に６人の課員が学校や教育機関に異動し、空いた席に寂しさを感じながら、報告書の作成など最後の事務処理に追われているところです。

今回の「長崎がんばらんば国体」では、全競技団体が「チーム長崎」として一丸となって戦った結果、目標であった「総合成績１位」を達成し、おかげさまで長崎県選手団の悲願であった「天皇杯」を獲得することができました。「ふるさと長崎」のために最後まで諦めずに全力で戦い抜いてくれた監督・選手はもちろんのこと、長崎国体に向けた各強化事業に関し、国体拠点校をはじめとする各県立学校には、長い間大変お世話になりました。

また、各学校から本県代表として出場した監督・選手に、学校独自の壮行式の開催や懸垂幕の掲示などで激励いただくと同時に、国体期間中は各会場を全校応援等で盛り上げていただきましたことに対し、心からお礼を申し上げます。さらに、開会式での式典前演技や競技大会の運営についても、多くの教職員や生徒の皆様にご支援・ご協力をいただき、重ねて感謝を申し上げます。

私事ですが、平成13年（体育保健課に勤務）に、平成26年の国体開催を長崎県に誘致するため、長崎県議会・長崎県教育委員会・長崎県体育協会の決議を受け、日本体育協会と文部科学省に「要望書」提出する業務を行ったのが、長崎国体との最初の出会いでした。その時は、まだ13年も先のことであり、自分には関係ないだろうと他人ごとのように考えていました。

ところが、平成21年に県体育協会に派遣されてからは、国体の誘致が正式に決定し、いよいよ国体から逃げることができない状態に追い込まれていました。国体に協力的で前向きな競技団体がある一方、一部の団体からは「私たちは長崎国体に賛成していない。」とか「開催県が天皇杯を取る必要はない。」などと、必ずしも一枚岩ではない状況もありました。

それから約５年間、競技団体理事長会、国体強化スタッフ研修会、競技団体ヒアリング等を毎年開催するとともに、本課の指導主事が担当する競技の練習会場に足繁く通った結果、次第に競技団体の意識も「長崎国体のために何ができるか」と変わり、「チーム長崎」としての一体感が徐々に生まれていきました。

本県選手団活躍の要因は、競技団体がスクラムを組んで戦う「チーム長崎」の団結力を柱として、少年種別は中・高校生の強化のためのジュニアニアスポーツ推進事業をベースに、国体拠点校が学校の協力を得て、責任を持って取り組んでくれたこと。成年種別は強化指定クラブやスポーツ専門員の活躍とともに、過去最高となる「ふるさと選手」が参加してくれたこと。それに、長崎県民の大応援団の後押しがあったことが、今回の結果につながったと確信しています。

これからは、高まった競技力を維持していくためにも、本県の特性を活かし、可能な限りこれまでの強化策を継承し、今後も国体や各種全国大会で優秀な成績を収めるとともに、2020年の東京オリンピックなど世界での活躍が期待できるよう、「めざせ日本一、とびだせ世界へ」を合言葉に、本県選手の発掘・育成を第一に取り組んでいきたいと考えています。

「長崎がんばらんば国体」は大変やりがいのある仕事でした。いまだに達成感に浸っていますが、唯一やり残したことは、皇后杯に手が届かなかったことです。これは、半世紀後に回ってくるであろう三巡目長崎国体への宿題となりました。多分、私を含め殆どの事務長さんがこの宿題の履行確認はできないでしょうが・・・・（笑）。

最後になりましたが、この場をお借りしまして、本県スポーツ史に残る熱い戦いを繰り広げていただいた選手団及び関係の皆様、大会開催にご尽力いただいた全ての県民の皆様に、改めてお礼申し上げますとともに、つたない文章を快く掲載していただいた長崎県公立学校事務長会の今後ますますのご発展を心から祈念し、「長崎がんばらんば国体」のお礼とさせていただきます。

編集後記

昨年からの消費税率改定に加えて、学校運営費予算の大幅な削減により、今まで以上の予算の効率的執行が求められ、どの学校事務室も大変なご苦労をされていることと思います。

そんな中、昨年の「長崎がんばらんば国体」と「長崎がんばらんば大会」の県勢の、とりわけ高校生の活躍は、我々に明るい話題を提供してくれました。

今回、競技力向上対策課長の森栄二様に執筆をお願いしましたところ、快くお引き受けいただき、本当にありがとうございました。また、宮崎事務局長様、今春ご勇退される方、新任の方からも、お忙しい中執筆をいただきました。心から感謝申し上げます。

「ばってん」がより良いものとなるよう、今後も引き続き、皆様のご協力とご指導をよろしくお願いいたします。

（K・H）